

大学サッカー選手のモチベーション変化と競技力の関係性について  
The relationship between motivation and game performance  
in college soccer players

1K06A231

指導教員 主査 内田直先生

松本怜

副査 広瀬統一先生

．緒言

モチベーション (motivation) とは、動機付けと訳されており、わが国では心理学の専門分野で開発された評価法をスポーツ選手に適用することが多く、スポーツ選手が競技場面で必要とされる心理的能力を調べる評価法は皆無であった。こうした背景のもとで、徳永らが1983(昭和58年)年頃から独自に、スポーツ選手の心理的競技能力の診断方法とトレーニング方法について研究を推進してきた。

．目的

私は小学1年から現在まで15年間サッカーを続けてきた。その経験の中で、サッカーとモチベーションには深い関わりがあると考えた。今回はモチベーションの中でも、試合に向けたモチベーションの変化という観点に限定した研究を行うことにした。本研究では、部活動に所属する現役大学サッカー部員を対象とし、AチームとBチームに分けて、この2群間におけるモチベーション変化にはどのような違いが見られるか、明らかにしていきたい。

．方法

本研究の対象者は、早稲田大学ア式蹴球部に所属する、31名の男子学生とした。Aチームに所属している16名に対して、約2ヶ月半の間関東大学リーグ戦4試合。Bチームに所属している15名に対して、約1ヶ月半の間に関東大学1リーグ4試合を対象として本研究を行った。

質問紙には、試合前の心理状態診断検査 (DIPS - B.1)、心理的競技能力診断検査 (DIPCA. 3, 中学生～成人用) の2つを用いた。まず実験期間の前に、被験者に質問紙 心理的競技能力診断検査 DIPCA. 3を行ってもらった。その後1つの試合に関して試合1週間前、試合3日前において、質問紙によりモチベーション変化についての調査を、DIPS B1を使って行う。

．【結果】

DIPS B1の結果を、AチームとBチーム各試合の心理的コンディションを1週間前と1日前の4試合分の平均得点を比較したグラフである。有意差はないが、Aチームの上昇の角度とBチームの上昇の角度からその差が目算できる。そのためにAチームのほうがモチベーションは高く、前後での変化があるといえるのではないだろうか。図8はAチームとBチームの心理的競技能力の平均点数を因子別グラフに示した。一番差が見られたのは協調性(18.3:16)である。統計的な検定にかけたところ、2つの因子に統計的有意差がでており、1つに有意傾向が見られた。統計的にこの3つの因子にしか差はみられなかったが、勝利意欲以外のすべての因子においてAチームが上回っていることが目算できる。

．【考察】

DIPS B1で得られた結果より、モチベーションを段階的に高めるだけでなく、ある一定の高い水準のモチベーションを常に持っていること

ということが必要なのである。DIPCA . 3の結果からは、高い競技能力を持っている選手は、数字の平均点が高く心理的競技能力が優れていて、競技能力の低い選手は心理的競技能力も低いとグラフから見れば差があった。そして決断力と協調性は統計的に有意差がでたが、他の因子においても有意差をさらに見出せたのではないかと考えられる。見出せなかった理由にはDIPS-B1とDIPCA . 3共に、研究対象となったア式蹴球部自体のレベルが低かったことである。そこを改善するために全国優勝大学のAチームとBチーム・プロチームのスタメンとメンバー外などに対象を増やすということが必要だと考えられる。また、今回は怪我をしている選手の結果も含めてしまったので、試合に出場できる状態にある選手に限ることも必要なのではないかと考える。